

# 飛騨地方における近代登山の展開と地域形成

岐阜大学 学生会員 ○近藤礼奈  
岐阜大学 正会員 出村嘉史

## 1. はじめに

飛騨地方は山地が多い地域であり、その北東には槍ヶ岳、穂高岳といった近代登山の勃興の中心となるような山々が連なっている北アルプスがある。なかでも、本研究の対象地とする旧上宝村は、北アルプスに隣接した深い山に囲まれた村である<sup>1)</sup>。

旧上宝村のような山間地では、平地は限られており、市街地の面積を拡大させていく都市のような発展は難しい。旧上宝村のような山間地が発展するには、道路ネットワークを発達させ、近隣の町村と協力していく必要がある。

本研究の対象とする大正末期から昭和初期にかけて時期の飛騨地方には、昭和9年10月25日に鉄道の高山本線の全線開通<sup>2)</sup>、昭和9年12月4日に上高地、飛騨山脈を含む中部山岳国立公園の指定<sup>3)</sup>という2つの大きな変化があった。また、大正12年に自動車が初めて上宝村に姿を見せ<sup>4)</sup>、自動車が走行できる道路の整備が必要になって来る時代である。しかし、道路ネットワークの発展のための財源は、山間地には乏しい。

本研究では、近代登山が大衆化したこと、地域の道路ネットワークが開発されたことが同じ大正末期から昭和初期にかけての時代の事象である事に着目する。道路の開発としては、上宝村と上高地を結ぶ安房峠、上宝村と丹生川村との境に位置し高山市へと続く平湯峠、上宝村と国府村との境に位置し古川町へと続く大坂峠などの3つの道路改修があった。

大正末期から昭和初期旧上宝村には、蒲田口、平湯口、双六口の3つの登山口があり、明治時代より平湯温泉、蒲田温泉等の温泉があり、上宝村の周囲には、神岡鉱山によって栄える船津町、飛騨地方の中心とも言える高山市、日本の国の国際観光政策の影響を受け、上高地帝国ホテルが創られた北アルプス登山の代表的登山口・上高地がある。さらに、昭和初期に鉄道開通や国立公園指定といった国の事業がある。近代登山の勃興の中心となる北アルプスの飛騨側の登山口となった旧上宝村を中心とした地域は、登山観光をどのように捉えていたのだろうか。

大正末期から昭和初期にかけて対象地域の道路ネットワーク(図-1<sup>5)</sup>)のように登山道と道路がはりめぐらされた)はどのように構築されたのだろうか。道路ネットワーク拡充のため財政はどうなっていたのか、近隣の町村との交通上重要な峠の道路改修事に着目し、大正末期から昭和初期にかけての旧上宝村とその周辺の道路ネットワークの発展を調べ、飛騨地方において近代登山の展開が地形成に与えた影響を明らかにすることが本研究の目的である。

## 2. 飛騨地方における近代登山の展開

飛騨地方における近代登山は明治初期のお雇い外国人の御獄、乗鞍岳、白山などへ登山に始まる<sup>6)</sup>。そして、明治の終わりに日本人による著名な山への初登頂次々行われ、日本山岳会・飛騨山岳会が設立

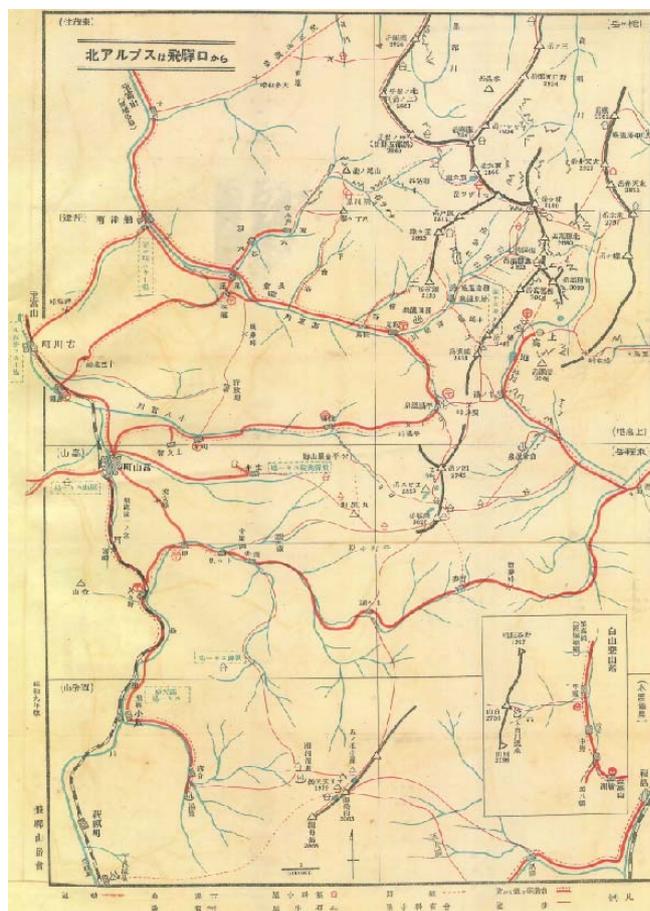


図-1 上宝村周辺の道路・登山道のネットワーク  
(昭和9年)

される。その後学生を中心とする登山者により積雪期の初登頂争いがあり、本研究の対象となる大正末期から昭和初期にかけての近代登山が経済的に恵まれた層に次第に広まり大衆化していく時代がある。

## 3. 道路ネットワーク拡充のための財政

上宝村は昭和初期、古川上高地線の県道編入請願書<sup>7)</sup>を県に提出している。

その古川上高地線の県道編入請願書には、開通が間近に迫っている飛騨鉄道の事に触れ、飛騨鉄道とつながっている道であるので、改修することでより登山客の誘致でき、是非事業をおこなってほしいこと、また上宝村の薄弱な財政では完成させることのできないため、道を県道に編入することによって、県で行ってほしいということが理由として書かれていた。

上宝村自体だけでは、薄弱な財政で十分に道路改修等の道路ネットワークを発展させることは、困難であったと、上宝村は道路改修等の道路ネットワークを発展させることを岐阜県に頼ろうとしていたこ

とが読み取れ、その理由は近代登山の勃興であり、近代登山は県に整備を請願する理由として他の件に提出される請願にも表れている<sup>8)</sup>。

#### 4. 安房峠の道路改修

昭和9年より昭和13年にかけて上高地と上宝村をつなぐ安房峠を通る道路改修<sup>9)</sup>が行われる。この道路改修は、峠を越える道を自動車の通れる道に改修する事業である。

昭和9年の議事録によると、昭和9年度の安房峠の道路改修工事費12500円を全額寄付で賄っている<sup>10)</sup>。安房峠の道路改修工事に寄付したのは、大野郡高山町長、大野郡丹生川村長、大野郡大八賀村長、大野郡高山町上島清一、吉城郡船津町長、吉城郡阿曾布村長、吉城郡古川町小瀬友吉の7名であった<sup>11)</sup>。

周辺町村の町村長、有志の寄附から見ても、この安房峠を自動車の通れる道に改修し、飛騨側から上高地まで自動車を通れるようになることの影響は大きい。広く飛騨地方に影響をもたらし、高山町に対しても影響があったと考えられる。

#### 5. 登山客から見た道路・登山道の整備状況

昭和初期の新聞はほとんど残っていないため、昭和初期の登山の様子や道路の整備状況は登山の記録より、検証していく。

図-2<sup>12)</sup>のように秩父宮殿下登山経路は詳細に記録が残っている。登りと下りで登山口が違うこと、温泉地に下山することが読み取れる。また、昭和2年では、自動車の通行が殆んどなかったこと、蒲田温泉は、この頃機能していなかったため、平湯温泉まで温泉につかるために行く必要があったことも秩父宮殿下登山の記録である『奉迎記念』より読み取れる。

#### 6. おわりに

上宝村に、道路ネットワークの整備に十分な財政は確保できず、近代登山は道路整備を岐阜県等にも進めてもらうための請願の理由に使われたことが把握された。

大正末期から昭和初期にかけて道路改修が行われた峠<sup>13)</sup>としては安房峠の外に、丹生川村との境に位置し高山市へと続く平湯峠、国府村との境に位置し古川町へと続く大坂峠がある。平湯峠・大坂峠についても同様に検証する。

しかし、道路整備の理由として使われた近代登山は把握できたが、近代登山の実態についてはどれほどのものであったか把握できていない。縣道編入などの道路整備の理由として使われている近代登山は実態として地域にどれ程の影響を与えたのか今後把握していく必要がある。

今回、秩父宮殿下登山については明らかにしたが、登山客から見た道路・登山道の整備状況は今後、登山の記録は、大学・高校の山岳部の詳細に残していることが予想されるため、道路ネットワークの発達を登山者の実際の記録からも明らかにできるよう大学・高校の山岳部の調査を今後進める。



図-2 秩父宮殿下登山経路

#### 参考文献

- 1) 上寶村教育會『登山案内日本アルプスと上寶村』1922. 7
- 2) 山田勝郎『飛騨公論 増大号 汽車がつくまで(381号)』1934. 10. 22, 裏表紙
- 3) 国立公園協會「阿寒、大雪山、日光、中部山岳、阿蘇国立公園の指定」、『国立公園 第6巻 第12号』, 1934. 12, (2010. 12 発行, 復刻版)
- 4) 上宝村史刊行委員会編『上宝村史』2005. 1, pp. 728
- 5) 飛騨山岳会発行「北アルプスは飛騨口から」1934
- 6) 木下喜代男「飛騨の近代登山史(上)」, 『斐太紀 2009年度』, 2009, pp. 29-40
- 7) 高山市公文書館所蔵: 『昭和7年上寶村會議録』, 「議第二十一號縣道編入請願ノ件」, 1932
- 8) 高山市公文書館所蔵: 『昭和8年上寶村會議録』, 「議第五七號 縣道編入請願ノ件」, 1933
- 9) 上宝村史刊行委員会編『上宝村史』2005. 1, pp. 729
- 10) 高山市公文書館所蔵: 『昭和9年上寶村會議録』, 「議第四〇號 府縣道道路改良工事施行ノ件」, 1934  
高山市公文書館所蔵: 『昭和9年上寶村會議録』, 「議第四三號 昭和九年度上寶村歳入追加豫算ノ件」, 1934
- 11) 高山市公文書館所蔵: 『昭和9年上寶村會議録』, 「議第四二號 寄附受理ノ件」, 1934
- 12) 上寶村『奉迎記念』1928. 5
- 13) 上宝村史刊行委員会編『上宝村史』2005. 1, pp. 729-730